

街の探偵

海野十三

青空文庫

キップの装置

『さつきから気をつけていると、コトンコトンと、微かなリズムミカルな音がしているね』
と、彼は指を天井の方に立てて云うのであった。

『ああ、僕にも聞えるよ。鼠が居るのじやないか』

と、僕はこたえた。

『ねずみ？ 鼠が音楽家でもあればねえ』

と、彼はニヤリと笑って、

『——あれは天井裏に、瓦斯ガスを発生する装置が置いてあるんだよ』

『え、瓦斯を発生するって、一体なんの瓦斯だい』

『多分キップの装置だろうね。亜鉛あえんを硝子瓶ガラスびんに入れて置いて、その上に稀硫酸きりゅうさんを入れるのさ。うまいこと水素瓦斯が出てきてはやみ、やんではまた出てくるんだよ』

『おい帆村ほむら。早く云ってくれ。なぜ水素瓦斯の発生装置が天井裏に置いてあるんだ』

と、僕は帆村探偵の腕をつかんでゆすぶった。

その途端に、電話のベルがけたたましく鳴りだした。

僕ははっとした。そして電話機のところへ駆けようとしたが、そのとき帆村が、『おい待て、電話機に手をかけるな』

『ええつ、なぜ——』

『俺の後についてこい。説明はあとでするから——』

というなり帆村は、椅子から立ちあがった。彼の手はその椅子を頭より高く持ちあげた。そしてつかつかと裏口の窓へ近づくと、持っていた椅子をはっしと窓にぶちつけた。

がらがらと硝子ガラスは壊れる。

『はやく俺につづけ』

と、帆村はその壊れたガラス窓から暗い外に飛だした。

僕はぎよっとした。そして無我夢中に彼につづいて窓からとびだした。全身の毛が一時にふるぶると慄えたように感じた。帆村は脱兎のように走る。僕もうしろから走った。

ひやくらい
百 雷の落ちるような大音響を聞いたのは、それからものの五分と経たぬ後だった。

ふりかえってみると、さつきいた事務所はあとかたもなくなつて、あとには焰えんえん々と火が燃えているばかりであった。

『ああ愕おどろいた』

と帆村がいった。

『君が電話へ出てみる。その瞬間に、あの大爆発が起つたんだ。敵は君がいることを、電話でたしかめようとしていたんだからね。いや全く生命びろいだつた』

と、いつて僕の手を強く握つた。

後になつて、あのとときどうしてその爆発が起ると分つたんだと帆村に訊いたところ、彼は涼しい顔をして、

『まさか君は、時局柄君自身が狙われていることを知らないわけではなからう。ああいう変な音響を耳にしたときは、すぐさてはと感じなければいけないんだ。これからもあることだ。変なことがあつたら、すぐさてはと考える、そして思いあたるところがあれば、すぐさま逃げだすようにしないと、君の生命は危いぜ』

『うん、それは分つた。だがあの爆発は、どんな仕掛だつたのかね。キップの装置がどうしたんだ』

『キップの装置といえ、水素瓦斯の発生器じゃないか。それが屋根裏で、ぶつぶつと水素瓦斯を出しているんだ。そこへ火をつければ、大爆発が起ることは、誰にも分る。こと

に水素瓦斯に空気が混つているときは、その爆発は更に激烈なものとなる。——だから、君を狙う敵は、電流仕掛で水素瓦斯に点火して大爆発をさせたんだ。僕は焼跡に駈けつけて、水素瓦斯に点火するため二本の電線が屋外に引張られていたのを発見したから、これに間違いはない』

毒瓦斯

『ホスゲン瓦斯の中毒で殺られたんだとき』

と、帆村は惨事のおつた部屋から顔を出した。

中には七つの屍体が転がっていた。鑑識課員に交つて憲兵の姿も見える。

日本飛行科学研究所の第四研究室員七名が、研究中に揃いも揃って、冷たい屍体となり終つたのであつた。この愕おどろくべき悲報に、僕は帆村探偵について、現場を覗きに来たというわけだつた。

『一体どうしてホスゲン瓦斯などにやられたんだね』

『それが分らん。なにしろ七名とも、皆死んでいるのだから』

そういつているところへ、部屋の中が俄かに騒がしくなつて、入口が大きく開かれた。中からは、数名の刑事や警官が、一つの屍体を担ぎだした。

僕はそれを見ると、横にとびのいた。

担がれている屍体が、ぎゅーつと顔をしかめた。

『あれえ、生きているじゃないか』

と、僕は思わず叫んだ。

『しつ、静かに。一人、息をふきかえしたのだ』

と警官が叱つた。でもその顔は喜びに輝いていた。

『——この男が口をきくようになれば、事件がどうして起つたんだか、分るぞ』

と、最後に部屋から出てきた警部が、部下にそつと囁いた。

帆村と僕とは、その生きかえつた男の後について、急造の病室について入つた。そこには瓦斯中毒の研究で有名な軍医のN大尉が、白い診察服の腕をまくつて病人を迎えた。

軍医はすぐさま、寝台の上に寝かした病人の診察にとりかかつた。

『研究員、まつしたせい松下清太郎。三十一歳——か』と軍医はひとりで肯うなずいていたが『よし、酸素

吸入を行う。それからカンフルの用意だ』

酸素吸入が始まると、蒼白だった病人の顔に、俄かに赤味がさしてきた。

軍医は、つづいて脈をじつと聞いていたが、不満そうに首をふって、

『瀉^{しゃ}血^{けつ}をする、急いでくれ』

と、助手たちに行った。

瀉血が、この瀕死の被害者を救った。

『よし、これでまず何とか立ち直るだろう。——警視庁の方。訊問は今から十分間かぎりですよ。それ以上はいけません』

捜査課の幹部は、すぐに松下研究員の枕^{ちんとう}頭に集ってきた。そして彼の耳のところを口をつけて、叱りつけるように相手を励しながら、事件の重要点をたずねるのであった。

『——午後三時頃、寒くなったので、窓を全部閉めた。そうですね。——それから、午後四時にストーブを一つつけた。午後五時にあと二つのストーブをつけた。午後七時になって、急に苦しくなつて、やりかけていた実験を中止した。すると部屋中にいた全員がまるでいいあわせたようにパタパタと倒れた。よろしい。——貴方も倒れた。その前に、窓のところへいって、窓を二つ開いた。その後は何にも覚えていない。——それだけですか。いやよく分りました』

被害者は、苦しそうに歯をくいしばっている。酸素のコックが、さらに大きくひねられた。

『どうだ、聞いたか』と帆村は手帖をポケットに収しまいながら、僕の横腹をついた。

『さあ、現場へ行ってみようぜ』

初めて僕は、惨事のあった室に入った。

実験装置がやりかけたままになってそこに転がっているのも、まことに痛ましいことであつた。

『ホスゲン瓦斯は、どこから入ってきたのかね』

『どこから入って来ようもないじゃないか。室内は密閉されてあるのも同然だ』

と帆村は舌うちをした。

『ストーブから不完全燃焼でもって一酸化炭素が出てきたのではないかね』

『ちがう。一酸化炭素なら、被害者の顔は赤くなつても決してこんな蒼い顔になりはしない。やはりホスゲンだ。ほら微かすかにのこっているだろう。林檎りんごのくさつたような匂いがするじゃないか』

なるほど、そういわれるとそんな匂いがしないでもない。

『相当の量が入ってきたんだらうね』

『そうだ、相当の量だ。相当濃いやつだね。しかも、短時間に、さっと入ってきたんだ』
『何処から？』

『それが分らない。さあこれからそれを探すんだ』

帆村は室内をのこのこ歩きだした。

『おい帆村君、こんなところに、空気抜けの穴が二つあるぜ。これは大丈夫かね』

『なんだ、空気抜けじゃないか。空気抜けは、室内の空気を上に吸い出すものだ。問題は
ない』

『果してそうかね。おい帆村君、空気抜けの上をしらべてみた方がいいと思うがね』

帆村は僕の顔をじろりと見たが、

『おい、屋上へ行ってみよう』

と僕を誘った。

懐中電燈をつけて、三階の階段をまた一つ上にのぼるとそこは屋上遊歩場であった。そしてその周囲は、高さ一メートルほどの厚い壁でぐるりととりまいてあった。その内側にびったり寄り添って空気抜けの烟突えんとつがついていたが、この高さは、周囲の壁よりもずつ

と低く、五十センチぐらいしかなかった。そして遊歩場のレベルともうすれすれのところから、空気の出てくる横窓が明あいていた。

『雨水がたまると、この穴から入りこみやしないかなあ』

と僕は、この背の低い空気抜けを指していった。

すると帆村は、いきなり僕の腕をとらえた。

『おい今日は朝から寒かったね』

『それがどうした。今日は朝から冷たい雨がふっていたよ。昨日に比べて、たいへんな変り方だ』

『うむ、そこだ。それで話が分ってきた』

『どう分ってきたんだ』

『いや、もう一つ分らねばならないものがある』

と帆村はしきりと空気抜けの煙突のまわりをさがしていたが、やがてその煙突のすぐ近くに立っていた鉄板でくみだてた小屋に目を光らせはじめた。

『これは何の小屋だろう』

『さあ、窓からのぞいてみればいい』

『いや、入口から入ってみよう』

帆村の立っているすぐのところ、この小屋の扉がついていた。把手ハンドルをひくと、呆気ないほど無造作に開いた。

帆村は兎のように小屋の中にとびこんだ。懐中電燈が、電光のように揺れた。

『おお、しめた。あつたあつた。これだ』

帆村は大声で叫ぶなり、一つの硝子壘をつまみあげた。

『なんだ、それは』

『いや、この中にホスゲンが入っていたんだ。この壘は小屋の隅に、横たおしになっていた。その壘の中は、向うの空気窓の方に向いていた』

『でも、ここは小屋の中だぜ。ホスゲン瓦斯が発生しても、まさか小屋を出てから向うの空気窓にとどくかしら』

『大丈夫、とどくさ』と帆村は自信ありげに返事をした。『ホスゲンは空気の三倍半も重い瓦斯だ。壘の中から小屋の中に流れだすと、床を匍はうよ。ところが床下が、ほらこんなにすいている。すると必然的に、屋上に流れ出すじゃないか。しかもその前に、待つていましたとばかり壁で囲まれた空気窓がある』

『空気窓から階下へ入っていったというのかい。逆じゃないか』

『なにが逆なものか。それでいいんだ。いいかね。屋上は寒冷だ。ところが惨劇のあった二階は、夕方から急にストーブを三つもつけて、とても温くなった。だから室内の空気は軽くなっている。ところへこの重いホスゲン瓦斯がやってきたものだから、これは温い空気と入れ替えに喜んで烟突を下ってゆく。そしてあのとおり七人が七人やられてしまったんだ』

『ほほう、そうかね』

『このホスゲンは、相当濃かったので猛毒性をもっていた。十分も嗅いでいれば、充分昏倒するぐらいの毒性はあつたと認める。しかし室内の七人は実験に夢中になっていて、それと気づかなかつたんだね。恐るべき——しかし危険きわまる熱心さだ』

そういつた帆村は屋上に出た。僕も彼のあとにつづいて外に出たが、そのとき帆村は^{たばこ}莖を吸うため、ぱつと^{マッチ}燐寸をつけているところであつた。

(「シユピオ」一九三八年四月号)

青空文庫情報

底本：「「シユピオ」傑作選 幻の探偵雑誌3」ミステリー文学資料館・編、光文社文庫、
光文社

2000（平成12）年5月20日初版印刷発行

初出：「シユピオ」

1938（昭和13）年4月号

入力：網迫、土屋隆

校正：門田裕志

2005年3月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

街の探偵

海野十三

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>